

顏文忠公二崇橐



祭伯父家州刺史文



維乾元元年歲次戊戌十月庚子朔

廿一日庚申第十三姪男銀青光

祿大夫使持節并饒州諸軍事饒

州刺史上柱國都尉丹楊縣開

國侯貞弼謹以清酌庶羞

「顔真卿の書」

④

祭伯文稿 唐・乾元元年（758年）

図② 右・顔真卿展本 左・宋拓甲秀堂帖本



『祭伯文稿』は、今回の展覧の顔となった『祭姪文稿』と『争座位文稿』ともに顔真卿の三稿と称されている。三稿の中でそれほど注目される作品ではないが、『祭姪文稿』と同年に書かれている。『告伯父文稿』『祭伯帖』と、また『祭伯父袁州刺史文』とも称せられる。真蹟は伝来せず、刻本が伝わるのみである。これまで影印された『祭伯文稿』は、宋時代に制作された『甲秀堂法帖』に収録されたものである。この『甲秀堂法帖』の完本は存在せず、ただその残本が唯一本のみ伝わる。戦前に博文堂から『宋拓甲秀堂帖』として精印された（図③）。多くの書物で紹介される『祭伯文稿』は、この印刷本をもとにしている。顔真卿展でも『祭伯文稿』は、展示されていたが、顔真卿の書風とは、相当に異なる明代に刻された『鬱岡齋帖』の重刻本に収録されるものであった。本誌の右頁は、『宋拓甲秀堂本・祭伯文稿』の巻頭を示した。また補助図版②では、本文の二行目と五行目の一部を比較して示した。展覧本は、字画も細く、筆勢も軽く、『祭姪文稿』や『争座位文稿』のもつ重厚な趣は、全く見られない。孤本『宋拓甲秀堂帖』の原帖は、戦前に讃岐の大西見山氏の所蔵であったが、いつの頃からこの名帖は、流失し現在は、北京の故宫博物院に所蔵されている。

伊藤滋（書齋名・木鶏室）



図③ 宋拓甲秀堂帖・博文堂本



書道芸術院

平成の群像 (2019)



上毛書道30人展 「旦」

北村白琉書



北村白琉

この度「平成の群像」最後の原稿依頼をいただき、これを機に来し方を顧み、これからを考えてみました。

高崎女子高校に入学して山本聿水先生に出会ったことが、長い書の道を歩む始まりでした。部活で毎日〱墨を磨り、トロトロの墨で顔真卿や木簡をよく臨書したことを懐かしく思い出します。在籍した3年間、全国学生書道展で連続全国優勝できたのは、先生の厳しく尚且つ優しいご指導の賜であったと思います。「我以外皆吾師也」と「稔るほど頭を垂れる稲穂かな」を座右の銘とし、率先垂範されていた先生の教えは、その後もずっと人生の指針とさせていただいています。

卒業後は就職し、勤め帰りに先生の元へ通い、白玄会にも入会しました。臨書は大好きでも創作力のない私には前衛書は無理と思い、暫くの間公募展への出品もできずにおりました。前衛書は漢字やかなを究めた上で志すものではないか、との思いが拭えずにおりましたが、「そんなこと言っていたら日が暮れてしまうよ」との先輩の忠告に納得して、前衛書と取り組むことになりました。白玄会で展覧会ごとに行われる揮毫会で、先生と先輩方に手取り足取り指導していただいて、漸く各展覧会に出品で

きるようになりました。

「書は線がいのち、線は書くのでなく引っ搔くもの」との山本先生の教えを胸に、甲骨文や金文を元に作品づくりに励みました。技量のない分を迫力、強さで補おうと筆を振り回しました。地元「上毛書道30人展」(上毛新聞社主催)の席上揮毫をさせていただいた時、俳句の友が「竜天に揮毫の墨のビックバン」という句を作ってくれました。句には程遠い作品だったので、以来本当にビックバンのような作品をと心掛けていますが、未だ果たせないでいます。

一方で、いつまでも力まかせに強靱な線を求めるだけではない。強さは内に秘めた穏やかで品格のある作品を書けるようにと願っています。そのためには古典臨書に励み広く芸術全般に親しみ、人間性を培う努力をしなければならぬと切に思います。今まで書の道を歩んで来られたのは、先生亡き後共に会を守って来た白玄会の仲間、そして家族の協力があってこそ心から感謝しています。

今年の単位認定講習会は群馬の伊香保温泉で開催されます。私は事務局長を務めさせていただきますことになりました。運営委員一同皆様のご参加をお待ち致しております。

書のひろば

理事長 辻元大雲

公益財団法人書道芸術院 第4回通常理事会開催

3月9日(土)院事務所にて本年度第4回の通常理事会が開催され、来年度事業計画、予算案、人事など諸案件が審議され決定した。

○議事

- ・2019年度事業計画、予算案審議
- ・事務所人事(事務局次長東福青室さん3月末退任、9年間次長として大変ご苦労され院事務所運営にご貢献いただいたことに深く感謝。
- ・学生版編集兼任の片岡豪峰さんは事務局次長に専念する。学生版編集に佐藤菜扇さん就任。
- ・その他。

○審議事項

- ・第73回書道芸術院展規定昇格、移籍退会など。
- ・2019年度単位認定講習会(伊香保)開催要項、担当講師など。
- ・書道芸術院秋季展開催要項(アートサロン毎日「書道芸術院の書」かな・篆刻刻字・前衛書」企画など。
- ・創立記念日講演会(11月23日精養軒、講師荒船清彦氏)
- ・第71回毎日書道展出品者懇親会(7月21日午後5時30分) 芝パークホテ

ル)

・第22回書道芸術院ウィーン国際交流書展開催。オーストリア日本大使館広報文化センター10月22日〜25日。ウィークショップ ウィーン、スロバキアで開催予定。訪欧団を募集、10月21日〜27日 5泊7日)

○その他 報告事項 (詳細は院報参照)

東博「顔真卿展」盛況に閉幕

毎日書道展70回展開催を記念して、毎日新聞社・NHKなどの主催で開催された「顔真卿Ⅱ王羲之を超えた名筆Ⅱ」特別展は1月16日から2月24日まで約40日間で198000人余の入場者が詰め掛け、大盛況であった。当初これほどの入場者があると予想もしていなかった。

特色は中国の方々にネットなどによる評判が高まったことで一説には約半数くらいは中国、台湾からの参観者といわれている。台北故宫博物院の秘蔵の超一級資料の展示は現地でもなかなか見ることができないこともあり、また東博での展示状況の素晴らしさが人氣を呼んだともいわれている。

更に出演内容が顔真卿祭文稿を中心として日中の一級名品を勢揃いさせた感があり、素晴らしいものであったことに感激させられた。入場するのに行列、祭文文庫コーナーでは60〜90分待ちが当たり前で、大変苦労したが苦勞など何のその、1回の見学では無

理で数回訪れた人が多かった。私も計10回ほど参観した。

昨年の創立記念日講演会にて東博富田淳学芸企画部長のご講演は実にタイムリーであった。会期中にも2〜3回レクチャーもしていただき感謝。

全日本書道連盟定例理事会

3月14日(木)公益財団法人全日本書道連盟理事会が上野精養軒にて開催、来年度事業計画・予算などを審議した。

- ・書写書道教育推進協議会活動報告
- ・日本ユネスコ登録推進協議会活動
- ・「日本の書200人選」(仮称)開催

2020年開催のオリンピック協賛芸術文化事業として企画案が関係機関から提案され、全書連、書美術振興会、毎日書道会、読売書法会、産経国際書会などが共同して実行委員会を組織して臨む。代表作家200名程度の他、障害者、児童生徒作品なども展示する。

会期 2020年4月25日〜5月10日

会場 国立新美術館企画展示室

詳細は今後実行委員会から発表予定
・講演会 6月6日総会後開催

講師 西島倭文氏(障害者への書道指導、制作支援活動報告)

・夏期書道大学講座 8月2〜4日

池袋サンシャインシティ
講座内容、講師等は後日発表

・任期満了による役員改選

2年任期の理事会役員改選のため選考委員会を組織。6月6日総会にて

・2019年度事業計画、予算案審議

・その他

第70回記念毎日書道展役員作品巡回新潟展開催

3月1日〜6日、新潟県民会館を会場に「第70回記念毎日書道展役員作品巡回新潟展」が開催された。毎日書道会役員作品60余点のほか、地元新潟で活躍されている毎日展審査委員、会員、会友などが出品 充実した展示会場であった。

初日1日には会場にて石飛博光・船本芳雲両氏のほか、参加の理事監事などによるギャラリートークと色紙揮毫など華やかに行われ、夕刻から日航新潟ホテルにて祝賀懇親会と続き、開幕を祝った。色紙は抽選で参加者に。

巡回展は3月21日〜24日の和歌山展に移動して閉幕する。

現代女流書100人展・新進展開幕

4月3日〜8日 日本橋高島屋を会場に開催される。第50回記念として先

達作家14人の遺作も展示される。

・遺作 香川春蘭、永井幸子ほか
・院関係出品者(69号既報)

香川倫子・下谷洋子・最首翠風・石井明子・飯高和子・金木和子・森舞扇・小林琴水・崎井恵風・工藤永翠・滝春芳・福島李舟・真下京子
*新進作家 岩垣若翠・九條純代・柳橋香仙

漢字 (一)

最首翠風

現代詩文書 (一)

大隅晃弘

私と大字系漢字作品

私が大字系作品に拘って制作を始めたのは30年ほど前になるだろうか。第29回書道芸術院展で準大賞を受けた作品はいわゆる明清調、漢字部では最も多いパターンだった。大字系作品を好んで書くようになったのは、師種谷扇舟の方向づけも確かにあった。

扇舟師は一人の人間の中に潜むダイヤモンドの鉱脈を見つける名人と言え。真の教育者に私はめぐり会えたのである。

である。しかしながら私は唯々として師の意見に従ったわけではない。

高校教師をしていた昭和四十年代、丁度その頃京都大学の井島勉著『書の美学と書教育』や伊福部隆彦の『現代の書道』にいたく感銘を受けていたのである。——漢字書は、その書構成を見るに視覚的芸術であるのみでなく思想的芸術である要素をもっている。

(中略) 漢文と

いうものが国民一般になじみのない特殊専門の人々のみのものになる傾向にある以上、今日迄のように漢詩や漢文をその素材とすることは社会的に不適になることが考えられる——と伊福部は言う。

21世紀の書

—私の主張—

1 書とは何か

—書とは何か—この自問自答なしに、書作を進めることは難しい。書とは「言葉」を「書く」行為そのもので、その結果として紙面に定着した作をいう。高村光太郎が書を「筆触」とし、石川九楊氏が「筆蝕」へと進展させたことからその意味が理解できる。筆触(=筆蝕)とは、筆が紙面を捕らえ、その確かな感覚を通して言葉を紙面に定着

させることである。ワープロやメールは「打つ」ことで言葉を綴るから、同じ意味の言葉を記しても、そのプロセスに大きな違いがある。

また、一枚の紙には元来、上下(天地)は存在しないが、紙面に対峙して「書く」ことを意識した瞬間に天地が生まれる。言葉を散らし書きで配置し、墨量の潤渇によって遠近的立体感を醸すことなどは、限られた紙面に書家独自の世界を創造したいという意識の表れに他ならない。

一方、書構の視覚要素(墨量変化・造形工夫・紙面構成など)を盛り込みながら、素材である言葉の意味内容を伝えようとする書の本質に関わる課題が存在する。書構の表現が過剰となれば可読性を欠き、可読性に重点を置けば書構の表現が単調となる傾向にあるからだ。

書が言葉の筆触表現であることは確かとしても、書かれた言葉の可読性に関する問題を棚上げしては——書とは何か——という自問自答は成立しない。この問題に関しては、他のテーマと絡めながら、今後の稿で改めて触れねばならない。

掲載作品は、荒地派の詩人、田村隆一の「言葉のない世界」から。筆の弾力、墨の潤渇に留意した。垂直の人間という強烈な言葉をぶっさらばうな線質でユーモラスに表現した。



平成7年「現代女流書展」

最首翠風書



「垂直的人間」(73cm×152cm) 第69回書道芸術院展

書道芸術院春華賞

「真心」



大石 仙岳



前衛書部
大石 仙岳

お陰さま
第72回書道芸術院展におきまして、栄えある「春華賞」の特別賞を頂き、誠に有り難うございました。
今回の出品作品の題名は「真心」であり、これまで積み上げてきた集大成のつもりで制作しました。
今回の受賞の背景には、師の浜谷芳仙先生をはじめ、書径会員の御支援によるものと、深く感謝いたしております。
前衛書は、常に斬新な試作と日頃の臨書によって線質の鍛錬の結果だと反省しております。
今後、更なる精進を積み重ねて、腕を磨き、書の改革に努めたいと思います。今回の受賞はそのご教示であると思いい、まだまだ未熟者ですので、よろしくご支援お願い申し上げます。

第72回書道芸術院展

〈1〉

「不退転」



種谷 悠輝



漢字部
種谷 悠輝

書道芸術院大賞

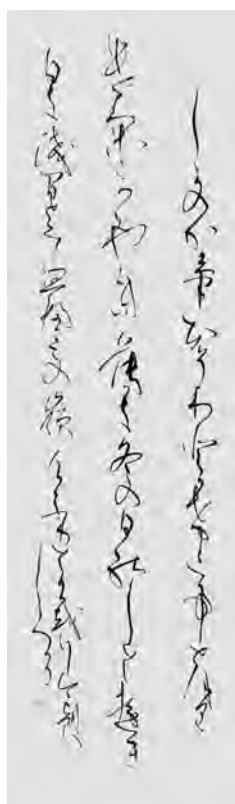
この度は、栄誉ある大賞を頂き、誠にありがとうございます。未熟な私が、このような賞を頂きましたのも、書道芸術院の先生方と日頃より優しく、時には厳しく指導、助言して下さる先生方や諸先輩方の応援があった事と深く感謝し厚く御礼申し上げます。
今回展で、私は「不退転」という言葉を書きました。何事も屈することなく、突き進む決意をもって今後も頑張っていきたいと思っております。この受賞を糧に初心を忘れず、精進を重ね、書の普及、発展のため少しでも役に立てるよう活動してまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

書道芸術院準大賞



「比翼連理」

伊藤 有津



「鹿のかげ」

戸來 益江



「輝」

高原 梨秀



「すすむ」

花里 智子



「冬の輪郭」

若見 苑柚

白雪紅梅賞



「吹雪の礼文」

白井 真理



「岡部文夫の歌」

岩崎 陽光



「送李給事帰徐州観省」

坂田 華月



「山村暮鳥の詩」

米谷 桃光



「宿温城望軍宮」

中島 恵華



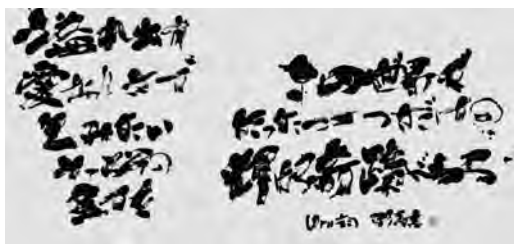
「樊圻面」

青木 藤蓮



「擬送別」

旭 箏陽



「奇蹟」

柿沼 彩香

白雪紅梅賞



「近作二種」

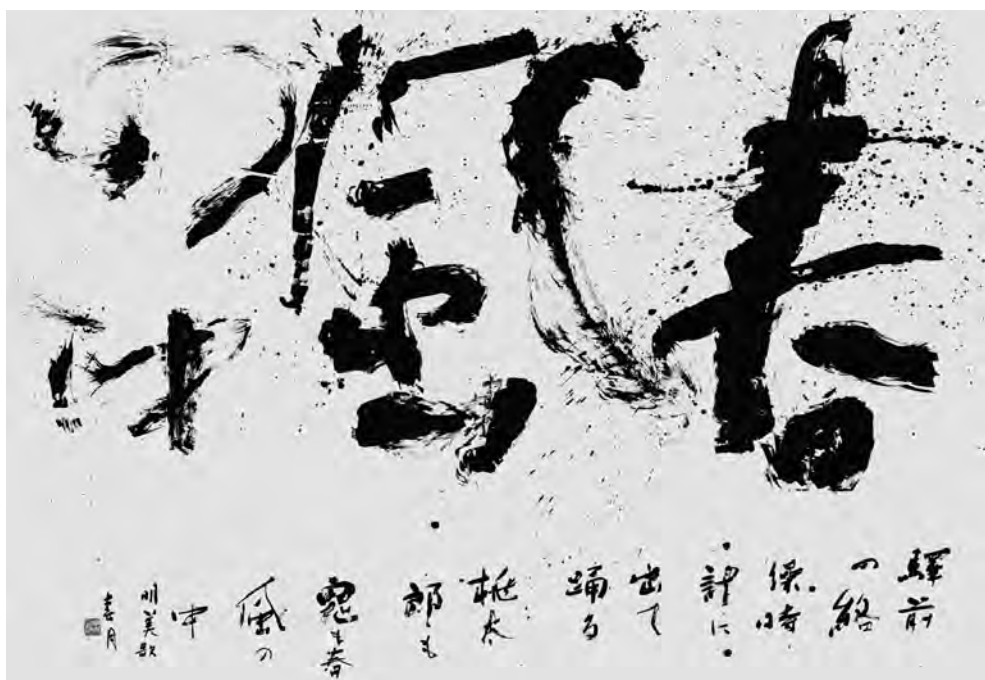
佐藤
花梢



「送字文六」

佐伯
哲哉

〈第71回書道芸術院展で選抜（春華賞・春華賞候補）された大作コーナー〉



「春風の中」 244×364cm

千田 春月



「良寛詩」 244×364cm

岩垣 若翠



「慈」 244×364cm

大町 青蓮

〈解説〉仏教を尊んだ北魏の孝文帝は、太和18年(494)洛陽に都を遷すと、南郊10キロに位置する伊水の岩山に龍門石窟を穿った。石窟の内部には、仏像と願文を記した3,000を超す造像記が刻された。魏靈藏造像記は、河北・鉅鹿出身の官吏であった魏靈藏と山東・河東出身の薛法紹の二人により、

皇道の興隆と一族の繁栄を祈願して造像されたものである。力強く角張った方勢の切れ味鋭い書風は、北魏時代の楷書の一つの典型を示している。龍門石窟のうち最も古い古陽洞内にある。無紀年だが、景明年間(500〜503)造と思われる。縦90.5×横38.0cm、全10行、1行23字から成る。(編集部)



(掲載図版85%に縮小)

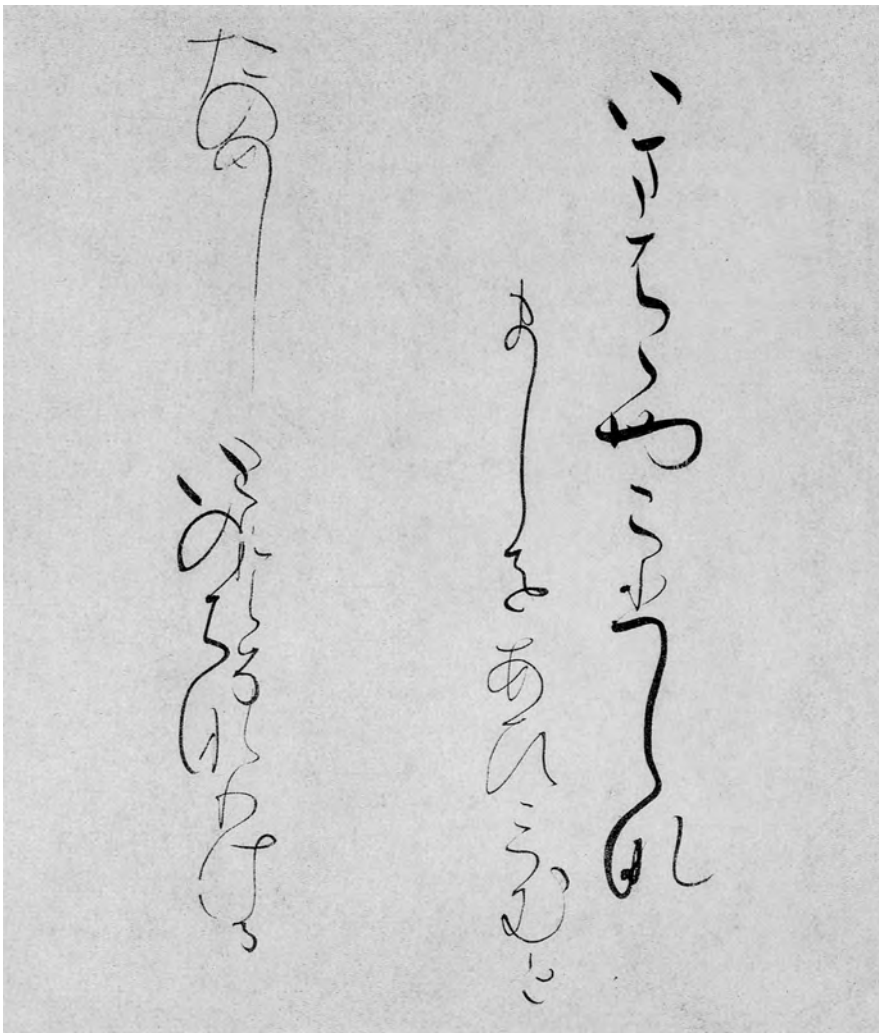
夫靈跡誕遷。必表光大之迹。玄功既敷。亦樹希世之作。自雙林改照大千。

漢字研究部臨書課題

＝(半紙普通判・縦使用) 上記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

＝(毎日展公募サイズ以内・縦横自由) 当該古典の上記掲載部分以外も可。



(東京国立博物館蔵)

〈よみ〉

いまはは(一)やこひしな那
 ましをあひみむと
 たのめしことぞ
 いのちなりける

〈解説〉

升色紙は清少納言の曾祖父で、歌人の清原深養父(908?~959?)の家集(個人の歌集)を書写したものである。もとは糸綴じの綴葉装冊子であったが分割され、その形が升のような方形をしていることからこの名がある。現在は模写本も含めて29葉30首が確認されているが、料紙は鳥の子(雁皮紙)の素紙や淡藍の染紙で、それに雲母砂子を撒いたものもある。当初は適宜詞書や題を交えつつ、1ページに1首半や2首書いたところもあったようだが、後に1枚1首に改められたものが多い。上掲の「いまははや…」も、ふくよかな字形で線に太細の変化をつけ、行と行を重ねて書くなど、美しく巧妙な構成だが、後世、改変の手が加えられたものである。(編集部)

※掲載図版は原寸。

※古筆は原寸(以上も可)で臨書し
 ましよ。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

**かな研究部
 臨書課題**

(半紙普通判(料紙可)・縦長に使用)
 別紙を裁断して貼付も可。半横紙は半紙サイズに切って使用のこと。
 上記の古筆の掲載の歌一首を書く。

**特別研究部
 臨書課題**

(毎日展公募サイズ以内・縦横自由)
 上記の掲載以外も可。

漢字規定 初段以上 【五月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

種谷萬城選書

春眠不覺曉
よみ（春眠曉を覚えす）

書体＝自由



習い方解説 (一)

種谷萬城

春眠不覺曉 孟浩然「春曉」
（春眠曉を覚えす）

春の眠りの心地よさに夜の明けるのにも気がつかず、うつらうつらしている。今月は、唐・孟浩然詩『春曉』の初句を、北魏の龍門造像記風に倣書しました。牛橛・始平公・賀蘭汗造像記などを臨書した後、点画が角張り、豪放で迫力ある魅力に溢れた書風を求め、剛毫筆、濃墨を用い、力強い起筆、送筆、収筆で、氣迫を込めて書きました。左記の一作は唐・虞世南の倣書で、温和な書風です。多くの古典から、様々な魅力に溢れた書風を学び、楽しみましょう。



漢字規定 秀級以下 【五月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

小竹石雲選書

習い方解説 (一)

小竹石雲

清貞可用
(清貞用う可し)
(王叔)

清く正しくして初めて取り用いることができる。

初心者の楷書の規範として何が適当か、諸説あると思いますが、第一に運筆のリズムの貫通性におき、情趣豊かで親しみやすい鍾繇の「薦季直表」を参考にして書いてみました。

楷書は一点一画に気をとられ気脈が通らなくなりがちです。

そのために1字を書ききる習慣を身につけるために左記のことに心がけてください。

- ・ ゆったりと構え、体に力が入りすぎぬようにしよう。
- ・ 墨は筆の根元までたっぷりつけ、筆先に心をこめ、丁寧に密度の濃い線になるよう運筆しよう。
- ・ 終画では筆の弾力を利用し次の画へ進むように書こう。
- ・ 運動は上下動が主となり余白が輝くように。

筆は兼毫中鋒を使用しました。



清貞可用

よみ (清貞用う可し)

書体Ⅱ楷書

かな規定 初段以上 【五月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

大辻多希子 選書

習い方解説 (一)

大辻多希子

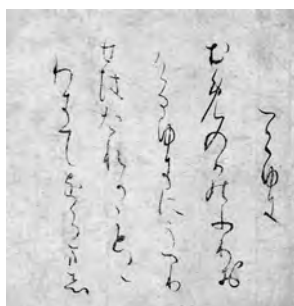
山里の春のゆふぐれきて見れば
いりあひの鐘に花ぞ散りける

（能因法師「新古今和歌集」）

山里の春の夕暮れ時を訪れて
みるといりあひの鐘が鳴る中、
花が散っていた。いりあひの
鐘は、日没時6時に撞く鐘の
意。

かな作品の散らし書きには、手
本となる古筆があります。左記に
掲載した「寸松庵色紙」は、行頭
や行脚はもとより、行間や、字の
間にも変化があります。書き始め
の位置や、行の長さも少しずつの
違いが見えます。また、幅の広い
文字の隣には縦長の文字がありま
す。古筆を深く鑑賞し、創作に臨
んで下さい。

〈寸松庵色紙〉

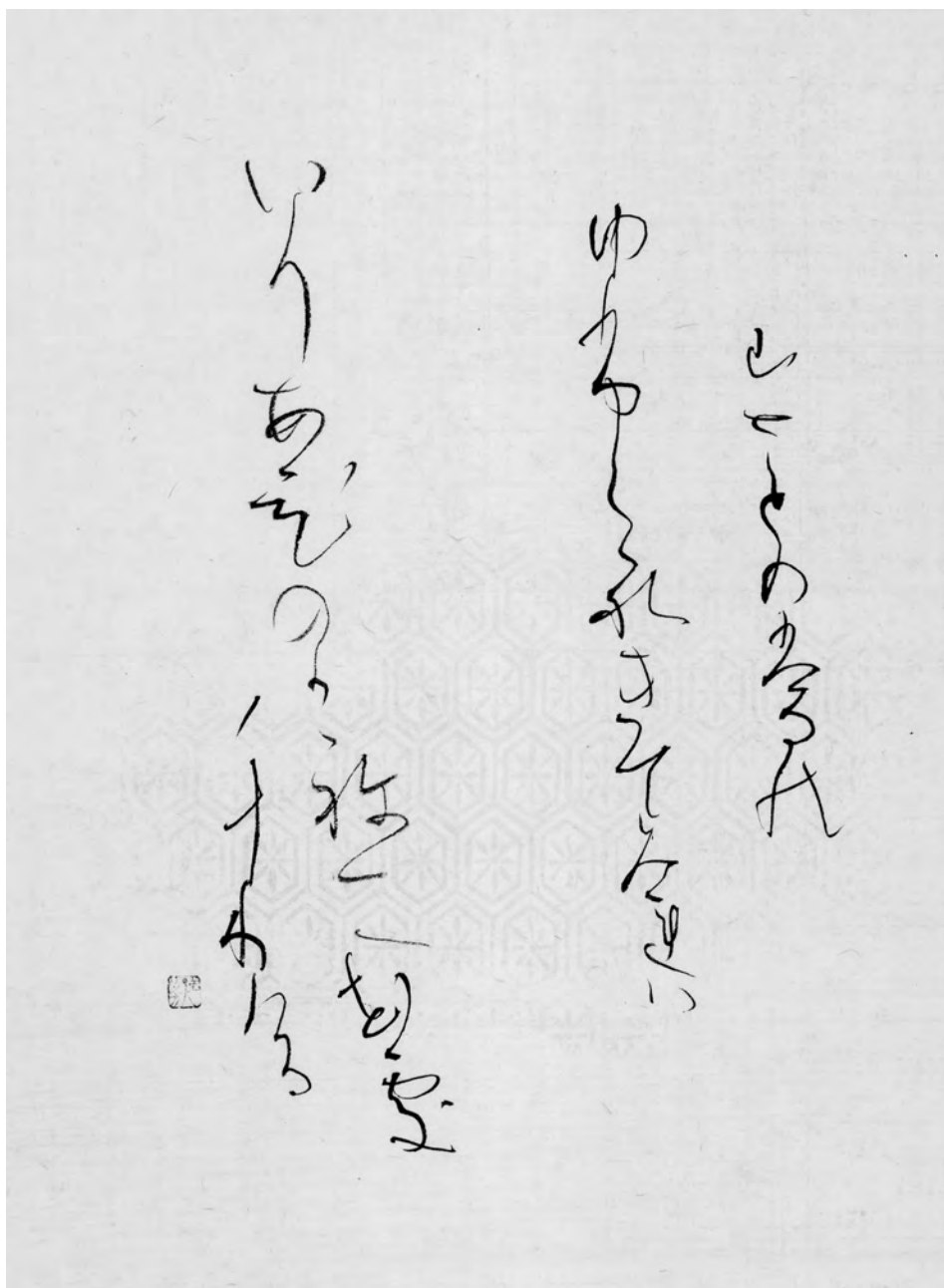


二玄社「原色かな手本」

よみ方

山里(さと)の春(盤る)の(能)ゆふ(布)ぐ(久)れ(礼)きて見(み)れ(連)ば(八)
いりあひ(飛)の鐘(可柝)に(二)花ぞ(處)散(千)り(利)け(介)る

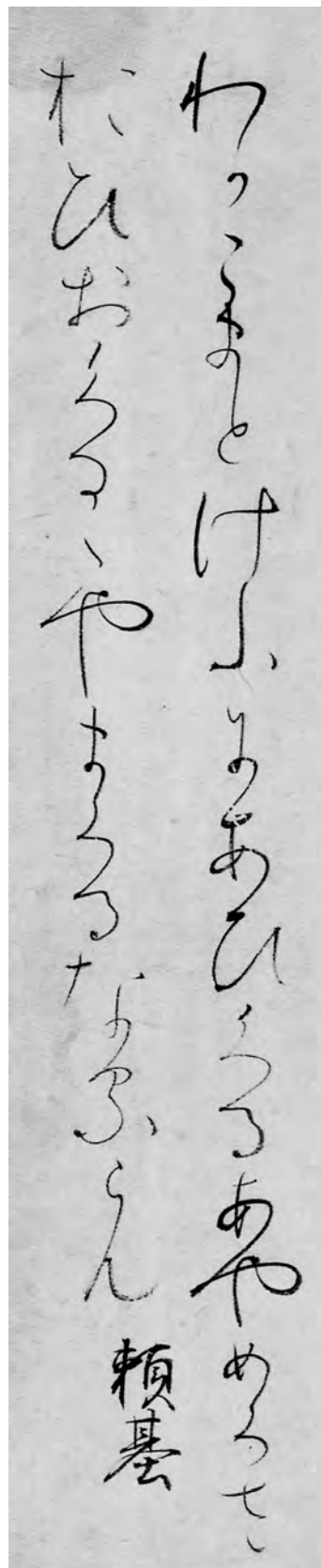
創作



かな規定 秀級以下 【五月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真の和歌を臨書する。または部分（2字以上の連続）を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集
（掲載写真拡大120％）



よみ方

わか(可)ごまとけふに(尔)あひく(久)るあやめぐさ
お(於)ひおく(久)るる(と)やまく(久)るなる(累)らん 頼基

習い方解説 (一)

善養寺 紅風

雲雀あがる春へとさやになりぬれば
都も見えず 賺たなびく
（おとものやからち）

（大伴家持『万葉集』）

今月は書き始めを漢字にしました。墨量が多すぎないように運筆して下さい。最初は、手本を良く見て習い、慣れてきましたら運筆の速さ、筆圧等に気を配ります。渴筆の部分は、ゆっくりと穂先が紙にくい込むように書くといいでしょう。自然とリズムが出てくると思います。

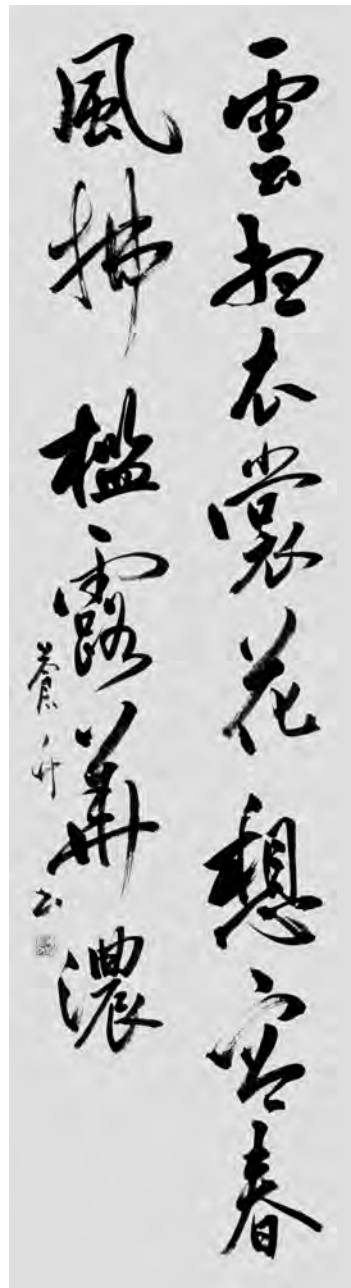
よみ方 雲雀あが(可)る(流)春へ(遍)とさやに(耳)な(奈)り(利)ぬれば(盤)
都(三)や(こ)も(毛)見えず(寸)霞た(多)な(那)びく(久)

創作

※タテ形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【五月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

名越蒼竹 選書



雲想衣裳花想容 春風拂檻露華濃
(雲には衣裳を想ひ花には容を想ふ、春風を拂うて露華濃なり)

書体||自由

漢字条幅規定 秀級以下 【五月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

半田藤扇 選書



道法自然
(道は自然を法とす)

書体||自由

習い方解説 (一)

名越蒼竹

「行草作品がまともに書けないでは一人前の書家とはいえない」これは師の言葉です。今月からの6回シリーズでは、行草書に絞って私の取り組んできたことの一端を紹介いたします。まずは行草書の元祖といえる王羲之の書風を意識して書いてみました。単体で書きながらも、線の太細・曲直・潤渾等の変化を盛り込みたいものです。

※タテ形式に限る

習い方解説 (一)

半田藤扇

新しく条幅の勉強する方にも、やさしい書法で書いてみました。行書の連筆は、ゆったりと自然な動きで書く。4文字の中心を通して書く事に心がけましょう。線の太細も大切です。また、偏と旁のバランスにも注意して書作してみてください。

※筆は羊毛筆を使用しました。

ペン字規定 【五月十五日締めきり】

川村美泉選書

春のやよいのあけぼのに
四方の山べを見わたせば
花盛りかもーら雲の
かからぬ峰、きなりけれ
越天楽今様 美泉書

用紙Ⅱはがきの大きさ(14.8×10cm)、白色のもの、黒インク使用のこと・四方の山べを…

書体Ⅱ自由

習い方解説 (一)

川村美泉

4月から半年間、ペン字を担当させていただくことになりました。皆様と一緒に勉強させていただきたいと思いますので、どうぞよろしく願います。

忙しい日々の中、ふっと子供時代を思い出すことがあります。四季を通じて見た美しい自然の風景…そしてその時の感動。それらを思い出す時、いつしか童心に帰り、優しい気持ちに包まれている自分に気がきます。

昔、歌った歌を書きたいな、そんな思いに駆られ、唱歌等を取りあげて書かせていただくと思っています。

今回は、「越天楽今様」で、平安末期から鎌倉初期の天台宗の僧、慈円が詠んだ美しい春の情景です。

①漢字とひらがなのバランス②運筆のリズム・緩急などを意識しながら、楽しくペンを走らせてみましょう。

※落款(自分の名前)を必ず入れる。

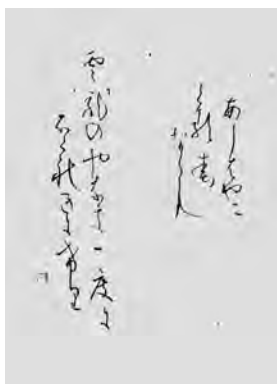
木一作品 各部総評

NO. 694

かな部 師範 押元 順子

全体のバランスに墨色、共に要領よく収め、リズムにも習練を感じさせる秀作。より表現多彩に／

◎かな部総評 毎回述べていますが、半紙に1首は適った字の大きさがあ。写真版を参考に、美しい収め方を学びたい。(洋子評)



漢字条幅部 師範 板橋 恵泉

大きく躍動する運筆が、紙面に広がりリズム感を生み出した快作。更なる成長を期待する。

◎漢字条幅部総評 上下級共書体自由の条幅部では多種多様な表現が可能です。基礎練習としても色々なスタイルへの挑戦を。(大雲評)

前衛書部 特選 庄司 紫千

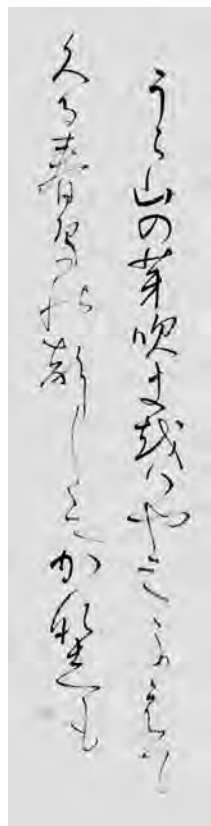
融合を細線が助長し、全体をしっかりとさせている。これが格調の創出にも効果を与えている。

◎前衛書部総評 モチーフにおける作者の内的衝動の弱さを感じさせる作品多い。これを強く意識してほしい。(魅香評)



かな条幅部 師範 星野 正子

作品の流れに眼が自然に従い快い。優しく上品な雰囲気は作者の心根の深遠さが思われ満たされる。



現代詩文書部 特選 平 杏華

潤渾の効果的な配置と余白の美しさの響きあいによって、情趣の溢れた早春の気が感じられる。

◎現代詩文書部総評 各人が素材と向き合い、紙との触れ合いを楽しんで下さい。(掃雪評)



◎かな条幅部総評 漢字芽と変体がなすの誤字多く、又漢字が過大で全体の美感を損ねた作が散見し残念。調和を大切に。(明子評)

漢字部 師範 岡部 藤環

漢簡風の隷書。線が柔かく、懐が広くゆったりとした字形で、安定感があり、温か味を感じる。

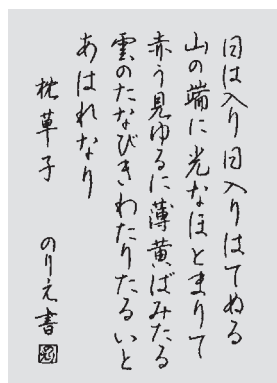
◎漢字部総評 上級は行草作品が多く見られたが、線質に工夫をし上質な作が目についた。楷、隷書作にも優品が見られた。(萬城評)



ペン字部 師範 遠藤のりえ

弾力ある豊かな線質の強弱によって、美しい字形がより立体的に表現された格調高い作品です。

◎ペン字部総評 リズムよく流れのある作品が多かった。美しい行間余白が作品全体を引き立てることに留意し更に研鑽を。(孝子評)



今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 辻元大雲 最首翠風 奥田瑞舟 山口仙草

現代詩文書 (玄穹) 千葉紅雪

文屋 亮「月のはるかな都」より



千葉紅雪書

60×180cm

◆ 明るい淡墨で直線を多用したシャープな作品。流れよく緊張感があり好感がもてる。

(仙草評)

◆ 斜めに切り込んだ線。大胆に大きい漢字に墨を入れ、にじみの景色を作る。得意分野でしょう。魅力的。

(瑞舟評)

◆ シャープな線に現代性を感じる。ほどよい潤筆のにじみがアクセントとなりあたたかさを加えている。

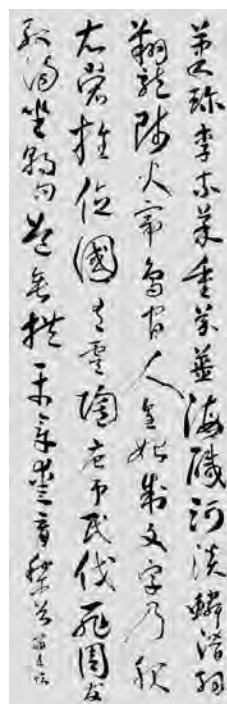
(翠風評)

◆ 独特の青淡墨が時に鋭く爽快に、また大きく広がるにじみが効果的に配置され、印象的な作となった。

(大雲評)

臨書 (千葉)

平野笛舟



「草書千字文」(千金帖)

平野笛舟臨

174×55cm

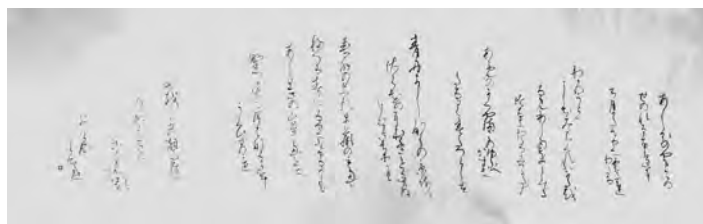
◆ 原帖の細やかな味わいを拡大臨書で表現する難しさに挑戦。やや甘さを感じるが、自然な変化を味わう。

(大雲評)

◆ 千金帖の細部まで観察し、原帖の表情をよく捉えている。2×6尺4行。大字表現見事にまとめあげた。

(仙草評)

かな (大社会) 矢口登江「足引の…」



矢口登江書

53×169cm

◆ 和歌6首を鍛錬された書線でまとめ魅力的な作となった。後半やや盛り上がり欠ける。墨量の変化を。

(仙草評)

◆ 耳馴れた和歌6首を難解な変体がなを用いず、美しい作品に仕上げている。今少し演出が有っても?

(翠風評)

◆ 中字表現を自然な展開で見せる。ややおとなしく、気迫に欠ける面もあるがほのかな情感を味わう。

(大雲評)

◆ 流麗に息長く和歌6首、練度の高い力作。確かな運筆でリズム良く表現。後半に少し墨が欲しい。

(瑞舟評)

◆ 専門部門での傑作ですね。濃墨での潤渇や文字の大小等、日頃の鍛錬の成果が出ています。

(瑞舟評)

◆ 6尺4行のやや大字での臨書ながら原帖の独特の味わいを見事に捉えている。潤渇抑揚の表現も巧み。

(翠風評)

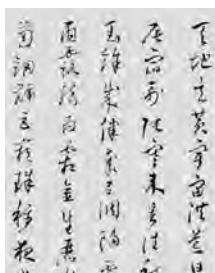
臨書 (大雲) 江本興舟「草書千字文」(千金帖)



江本興舟臨

54×174cm

部分拡大



- ◆一字千金と称される原帖の深みと余韻を見事に再現した。行間への配慮も巧みで見る者を酔わせる。(翠風評)
- ◆やや拡大した臨書は千金帖の情感をよく観察し、滋味溢れる作となった。細やかな気配を感じる。(大雲評)
- ◆天地いっばいに臨書し、余白が美しいと感じました。墨量が難しい多字数作品を淡々と書き上げました。(瑞舟評)
- ◆千金帖の細やかな特徴をよく捉え、明快で心地よい作となっている。用筆も確かで堂々の作。(仙草評)

前衛書 (松風) 西篠松雲「慈」



180×60cm

西篠松雲書

- ◆絡みあった重厚な書線が美しく、空間の捉え方も見事で躍動感溢れる作となった。印の位置一考要す。(仙草評)
- ◆大胆な墨の凝縮から始まった空間処理が巧みである。下部集団の描き始めが暗示的で意表を突く。(翠風評)

漢字 (もくせい) 森田藤谷「七言二句」



森田藤谷書

55×174cm

- ◆大胆な直・側筆の使い分けで華やかな作品である。連筆の生じる線の配分もほど良く、達者な腕。(翠風評)
- ◆七言二句を大きな運筆で横展開した作。潤渇のバランスも自然で安定する。最終行やや納めすぎか。(大雲評)
- ◆練磨された線質で横作品を仕上げた。大胆な展開で墨量の変化も美しく見る者を魅了する。(仙草評)
- ◆肉太な線質で字形を工夫し、伸びやかで強く、巧みな運筆に魅了された。(瑞舟評)
- ◆二層紙へ超濃墨による渴筆の動きが紙面に躍動する。やや息切れした感あり。落款印の位置など要一考。(大雲評)
- ◆超長鋒を使用しようか。粘りある濃墨で左右に揺れる時の墨溜とかすが景色となり躍動する。(瑞舟評)

制作の部(45点)
漢字 7点
かな 13点
現代 19点
篆刻 10点
前衛 16点
臨書の部(34点)
漢字 34点
かな 0点
総出品点数 79点

〈特選候補者〉

〈創作の部〉

「漢字」

大拙 皇中 成山
八街 熊谷 桃華
「かな」
如月 治田 芳江

「現代詩」
うる 今関 心華

麗澤 秋山之扇
八戸 市川 紫泉

陽陽 岩崎 陽光
大雲 松永 香秋

「前衛」
容洲 阿部 邑里

白珠 相内 沙莉
秀水 門脇 信子

玉州 角張 芳蘭
篤信 三浦 朱鳳

「臨書の部」
「漢字」

千葉 竹浪 叙舟
大雲 宮原 香扇

紅瑤 金井みどり
卯月 前田まさ美

大雲 神谷 雲卿

漢字研究部
(草書千字文)

選評 稲垣小燕

今月のホープ作品



長妻秀子

漢字研究部 特選 長妻秀子
原帖をよく観察されています。行き届いた運筆、深い線、字形も整っています。温雅で、端正な中に強い意志を秘めた書風を見事に表現されています。より一層心技共に磨かれま

内から出てくる感性が感じられます。静かな中に生命感が溢れ品性ある作品です。臨書するにあたっては、まず丁寧に原帖を見て、大変難しいことではありますが、その特徴を捉え尚且つ表面に出てこない深い精神性までもくみとって書くことが、懐素の草書千字文の臨書をする意義です。今回は大雑把な作品や誤字も多数あり残念に思います。

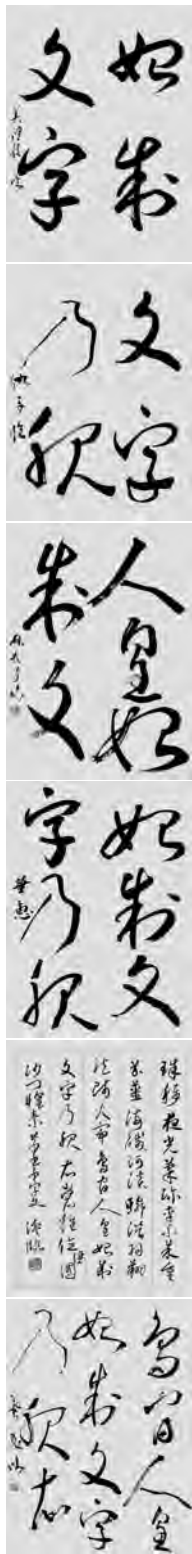
◎漢字研究部総評

この課題は非常に奥深いものです。筆圧の強弱・運筆の遅速といった用筆法だけでなく

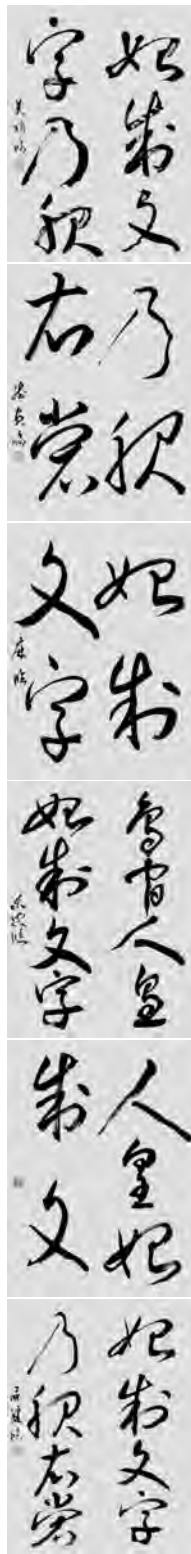
誤字も多数あり残念に思います。



蒼舜美 慶綯 慶綯
風水玲燁水子



葵澤 華衣 華衣
龍恵子子枝



藤由 東麻 東麻
佳理空美貞梢



晴香 美敦 美敦
洞蘭子子子舟

第72回書道芸術院展 〈併催＝第70回記念全国学生書道展〉

〈半紙の部 大賞作品〉



(中) 石川 結理



(小) 村田 結愛



(高) 梶原 有未



(高) 小泉 伶衣



(中) 曽我 みなみ

ごあいさつ

公益財団法人書道芸術院理事長 辻元 大雲

昭和22年11月23日に創立された書道芸術院は、翌昭和23年1月に東京都美術館で第1回展を開催し、昭和26年8月に第1回全国学生小品競書大会を開催（以後年に2回開催もあり）、書写書道教育の推進と将来の書道文化の担い手を育成する目的として本年度で70回の歴史を刻んで参りました。

夏に開催の半紙による「全国競書大会」と冬の本展に併催された半切条幅による「全国学生書道展」と年2回の開催を継続し、64回展より半紙部門、半切1/2部門を併合して2月の書道芸術院展に統一してから、早や7年を経過しました。

本年は70回記念展として「70回展記念賞」を設け、入賞目録へ上位A賞全入賞作品を掲載、さらに2月10日表彰式当日午前到大賞受賞者による席上揮毫会など、種々企画しました。

文部科学省学習指導要領に基づく基礎基本に拠った書写表現、さらに芸術書道表現へと進む高校生・大学生部門と多彩な作品を多数ご応募いただきました。児童生徒の皆様、ご家族の方々のご協力に深く感謝申し上げます。第72回書道芸術院展作品、学生展併催の「指導者作品展示」も併せてご覧下さるようお願い申し上げます。

〈半紙の部 準大賞作品〉



(小) 玉井 日菜子



(小) 岡本 実樹



(中) 菅原 京香



(中) 仁科 春葉



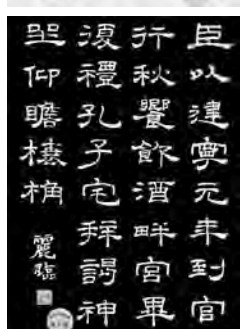
(中) 米原 憂奈



(中) 板谷 実歩



(中) 中山 海



(高) 田島 麗



(高) 市川 咲良



(高) 齋藤 未来

〈半紙の部 第70回記念賞〉



(小) 深田 真央



(小) 千葉 優逢



(小) 内川 千歩



(中) 平田 香梨奈



(中) 岡田 ひなた



(中) 池田 遥南



(中) 池田 結久美



(中) 西原 詩乃



(高) 館石 結奈



(高) 佐竹 ひかる



(大) 二村 由名

へ半切 1/2 の部 大賞 作品 へ



(中) 石 原 きらら



(小) 川 上 心大朗



(高) 和 田 木ノ葉

〈半切1/2の部 準大賞作品〉



(小) 江藤 佳奈恵



(中) 池田 遥南



(中) 川名 葵



(中) 酒井 愛望



(高) 小野寺 奈桜

〈半切1/2の部 第70回記念賞〉



(小) 平野 莉音



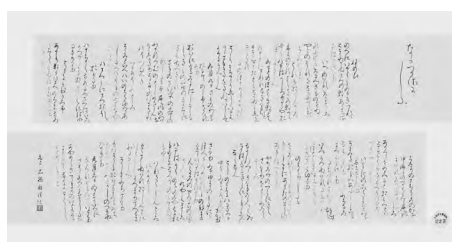
(中) 白石 翠香



(中) 日野 愛里紗



(高) 工藤 彩華



(高) 石橋 朋佳

第70回記念 全国学生書道展

「指導者作品展」役員作品



「成（甲骨文）」
顧問・名誉会員 小伏 竹村



「幸」 顧問・名誉会員 香川 倫子



「梢の花」 実行委員長 下谷 洋子



「健安」

運営委員長 辻 元 大 雲



「變（変） 変化する」
実行副委員長 後藤 大峰



「鹿」 実行副委員長 小竹 石雲